

VI 付論

(1) 「安宅御船蔵」にはどのような船が格納されていたのか

－「徳島藩御船絵巻」の紹介を中心に－

須藤 茂樹（徳島市立徳島城博物館）

はじめに

近世大名の所有する船に関する資料は多いとはいえない。文献史料は確認できても絵画資料は少ない。

そのような状況にあって、徳島藩に関しては徳島市指定文化財（絵画）「徳島藩参勤交代渡海図屏風」（徳島市・蓮花寺所蔵・徳島城博物館寄託）をはじめ船舶に関する絵画資料が比較的多く残っている。徳島藩では森崎春潮のように「船絵師」ともいうべき船舶関係を中心に御用を務めた絵師の存在が指摘される（須藤 2001）。

さて、ここで紹介する「徳島藩御船絵巻」（1997 年展示時「御船之図」と資料名を付けた）一巻は、蜂須賀家が所有する船舶を網羅的に描いたもので、記録することに力点を置いて調べられたものと考えられる。蜂須賀家で作製され、同家に伝来したものであるが、現在は徳島市立徳島城博物館が保管している。本絵巻を本稿では、「徳島藩御船絵巻」と呼称したい。それは、至徳丸を中心に徳島藩の御座船だけを描いた「蜂須賀家御船絵巻」（蜂須賀正子氏寄贈 徳島城博物館所蔵）と区別するためである（須藤 2001）。

発掘調査で確認された安宅御船蔵の構造については、「安宅御船蔵絵図」が残されており、詳細を把握することができるが、本絵図には所々付箋がはずれている箇所があるものの、付箋で各御船蔵に格納されている船舶の名称などが記されており、徳島藩が所有している船舶がどのように格納されているかを知る上でも貴重な絵図である。

ここに紹介する絵巻によって、どのような船を徳島藩が所有し、またどのように安宅御船蔵に格納されていたかをビジュアルに知ることができる。安宅御船蔵の研究、あるいは徳島藩の船舶研究、さらには日本の近世船舶研究など、今後の研究進展の一助となれればと考え、本絵巻を全図紹介するものである。

1 「安宅御船蔵絵図」

本絵図については、すでに坂東美哉氏の簡潔な解説があるので、それによりながら紹介をしておきたい（徳島市立徳島城博物館 2001）。

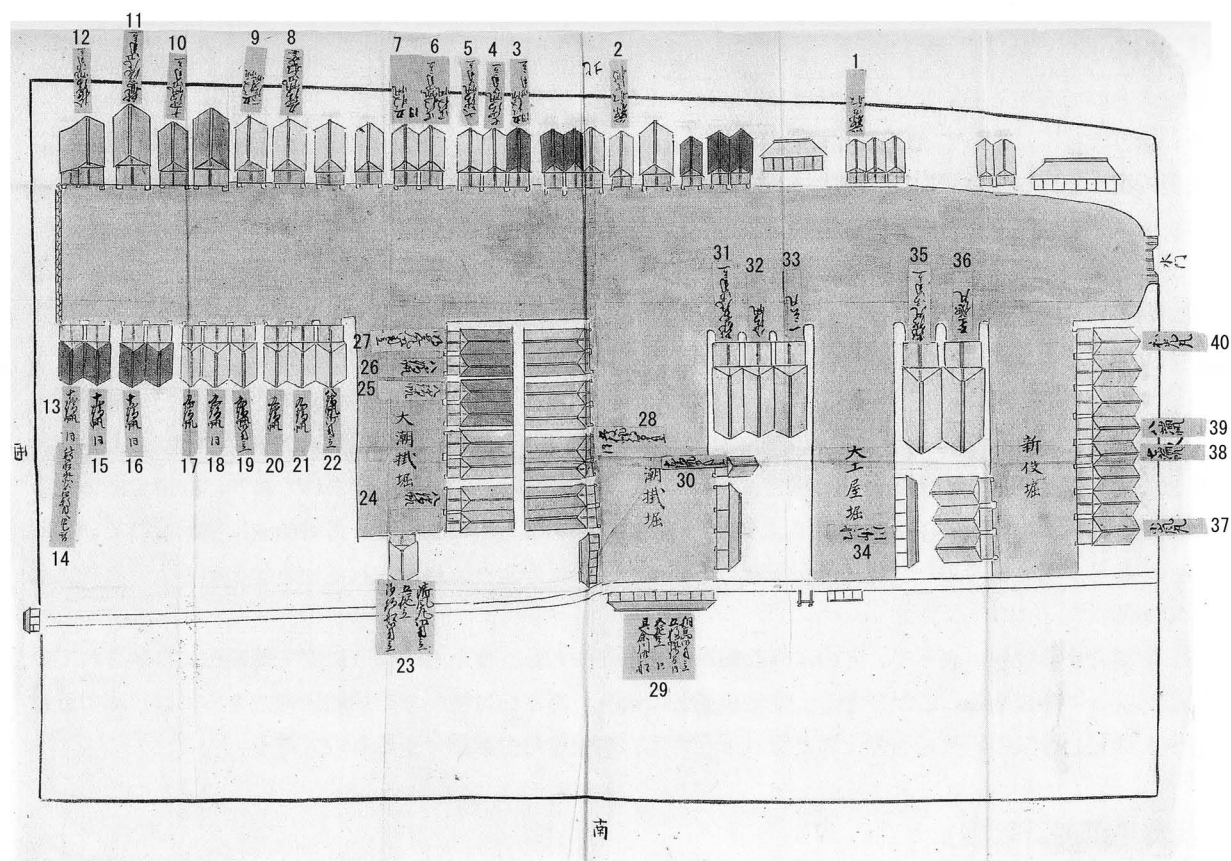
東西 78.8cm、南北 55.2cm で、紙本、手書き著色である。江戸時代末期に描かれた見取り図で、安宅御船役所に設けられた船舶の格納庫を図示したものである。この図を所蔵している笹尾家は、徳島藩の船大工であり、よってこのような絵図を所持していたものと推察される。

本図には役所の建物などは描かれておらず、堀と御船蔵・御船屋が描かれている。図の中央には、沖洲川から水を引き入れた大きな堀が描かれており、堀の全長は東西 220 間、南北 23 間である。この中央の大堀から南へ 4 本の支堀があり、水門のある東側から「新役堀」「大工屋堀」「中潮掛堀」「大潮掛堀」と名付けられている。これらの堀に沿って 76 軒の建物があり、そのほとんどが御船蔵・御船屋である。68 軒の御船蔵・御船屋が堀に直結する形で描かれている。

さて、本図には、剥がれていると思われる箇所があるものの、付箋が貼られており、各御船蔵が格納する船舶の名前、規模などを知ることができる。付箋の文字は下記のとおりである。

1：鯨御船。2：鯨船四艘。3：五枚帆／同 御用立。4：七端帆御用立。5：六端帆御用立。6：四枚帆

御用立／四枚帆。7：五枚帆／同。8：九端帆御船家無。9：五枚帆／六端帆。10：十一端帆御用立。11：鷺尾丸御用立。12：拾端帆御用立。13：十端帆 同。14：八軒御御船家所引四軒同御登替。15：十端帆 同。16：十端帆 同。17：九端帆。18：九端帆 同。19：九端帆御用立。20：九端帆。21：九端帆。22：八端帆御用立。23：晴風丸御用立 五艇立御釣船御用立。24：八端帆。25：八端帆。26：八端帆。27：明光丸御用立。28：五枚帆傳馬御用立／同。29 胴高御用立 五枚帆傳間同 五艇立 同 具余川御船。30：十端帆御用立。31：飛箭丸御用立。32：八端帆。33：一言丸。34：川御船。35：飛鳴丸御用立。36：至徳丸。37：小嵐丸。38：七端帆。39：八端帆。40：和光丸。



第 157 図 「安宅御船蔵絵図」

以上の付箋の記載から、御召関船の至徳丸・飛鳴丸、御召替関船の一言丸・飛箭丸、御台所船の鷺尾丸、御召小早小嵐丸、川御座船の明光丸、その他和光丸、清風丸の御召船の名称が確認でき、さらに 11 端帆から 4 枚帆までの船舶が 33 艘、鯨船、御釣船、川御船、胴高船が数艘ほど格納されていたことがわかる。

2 「徳島藩御船絵巻」と徳島藩の船

「徳島藩御船絵巻」は、紙本著色、縦 26.9cm、横 1350.0cm の長大な巻物である。時代は特定できないが、江戸時代後期のものと推測され、その段階での御召御座船を中心に徳島藩が所有する船をほぼすべて描いたものと推定される。

以下、別表に配列順に船名などを列挙する。(第 62 表)

以上、徳島藩所有の 42 艘の船舶を描いている。

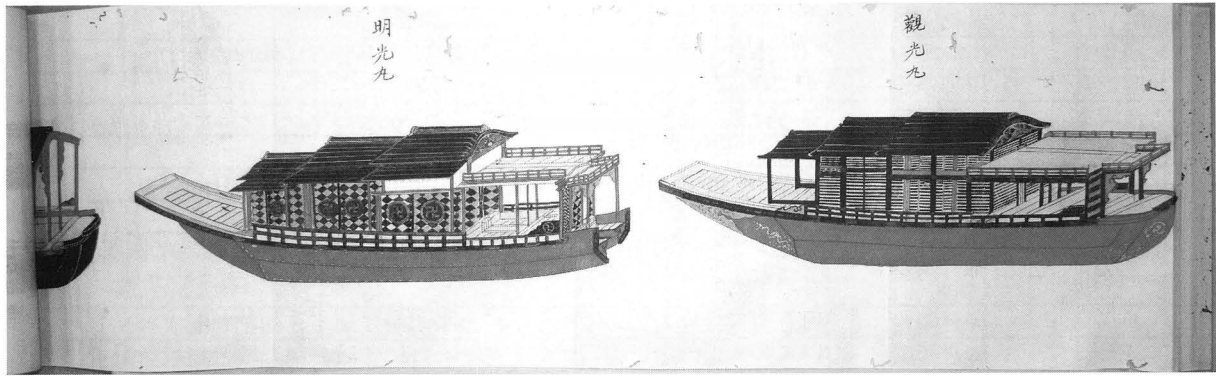
詳しくは別稿に譲りたいが、主要船舶のみ解説を加えておきたい(国史大辞典編集委員会編 1979 - 1993)。

一般的に御座船というのは、藩主が乗船する関船を指すことが多い。関船は、戦国時代から江戸時代にかけて

番号	船名など	種別	備考
1	観光丸	川御座船	朱塗り 水押の先と艫の洞の最後部に金泥で波に龍を表わす。
2	明光丸	川御座船	朱塗り 板戸に丸に左万字紋を配する
3	清風丸	川御座船	船体は黒、上部は朱塗り 障子 唐破風なし
4	和光丸	川御座船	朱塗り 障子 唐破風なし
5	御召替	川御座船	朱塗り 障子・丸に左万字紋を配した板戸 唐破風あり
6	高瀬船		
7	千山	御召鯨船	安政4年9月建造の千山丸が現存 重要文化財 金と藍地に団扇・軍配を配す
8		御召鯨船	奥方用（女性用）の鯨船か 白と朱の地に扇子と菊花を配す
9	蹴波	御召鯨船	白・金・朱の地に将棋駒を配す 水押に替紋の稲丸紋と桐紋を配す
10		御召鯨船	奥方用（女性用）の鯨船か 白地に牡丹を配す
11	遂竜丸	御召鯨船	金・朱の地に扇子を配す 水押に丸に左万字紋と唐草を配す
12		御召鯨船	奥方用（女性用）の鯨船か。金・朱の地に鳥の羽を配す
13	釣御船		木地 水押に菊花を配す
14			木地 水押に菊花を配す
15	至徳丸	御召関船（御座船）	朱塗 板戸に丸に左万字紋を配す 竹に左万字紋を配す
16	飛鷗丸	御召関船（御座船）	朱塗 板戸に丸に左万字紋を配す
17	一言丸	御召関船（御座船）	朱塗 板戸に丸に左万字紋を配す
18	飛箭丸	御召関船（御座船）	朱塗 板戸に丸に左万字紋を配す
19	順好丸	御召小早	朱塗 板戸に丸に左万字紋を配す
20	晴好丸	御召小早	朱塗 板戸に丸に左万字紋を配す 柳・扇子・団扇を配す
21	猶箭丸		朱塗 全体に丸に左万字紋を配す 後部に万字崩しを配す
22	小嵐丸	御召小早	朱塗 全体に丸に左万字紋を配す
23	波切丸	御召小早	朱塗 全体に丸に左万字紋を配す
24	風切丸	御召小早	朱塗 全体に丸に左万字紋を配す
25	小龍丸	御召小早	朱塗 全体に丸に左万字紋を配す
26	鷺尾丸	御台所船	朱塗 全体に丸に左万字紋を配す
27	飛鳥丸	御召関船	木地 丸に左万字紋を配す
28	沙棠丸		木地
29	拾壹反帆		木地
30	拾反帆		木地
31	九反帆		木地
32	八反帆		木地
33	七反帆		木地
34	六反帆		木地
35	五枚帆		木地
36	鯨船		白の地に朱で文様
37	四枚帆		木地
38			木地
39	三枚帆		木地
40			木地
41	胴高		木地
42			木地

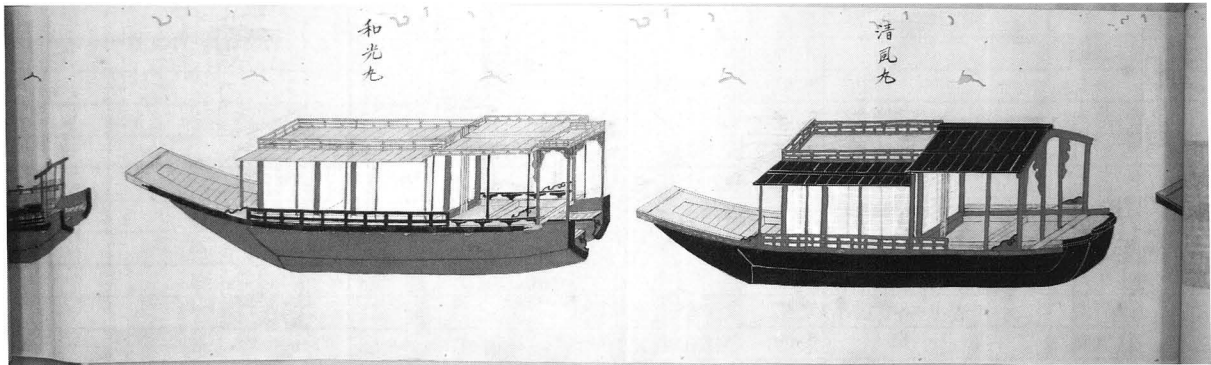
第 62 表 「徳島藩御船絵巻」に描かれた船一覧

て水軍で使用された軍船の一形式で、速力に重きをおいたことから早船とも呼ばれた。近代海軍の戦艦に相当する安宅船に対して巡洋艦の役割を持つ船のため、大型船ではなく、櫓数 30 から 40 挺立の中型船が主であった。海賊が海上の要所に関所を設けて関銭（通行税）を徴収して海上の安全を保証したことから関所で使用した船に由来するとの説があるが、確かな由来は不明である。いずれにしても、江戸時代には船型呼称として定着している。江戸幕府が慶長 14 年（1609）諸大名に対し、500 石積以上の大型船の所有を禁止したことから、軍船のなかでは最強のものとなり、70 挺立級の大型関船も造られた。速力を出すために波切りのよい鋭角的



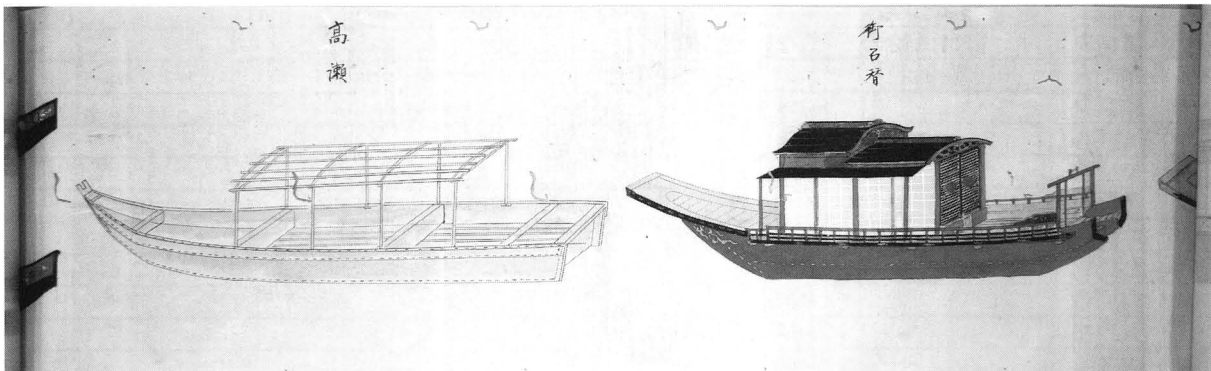
2：名光丸

1：観光丸



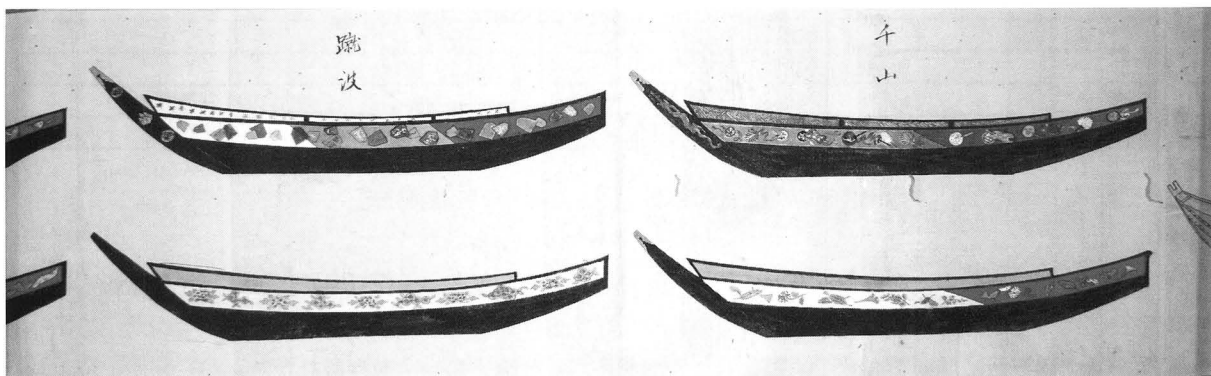
4：和光丸

3：清風丸



6：高瀬舟

5：御召替



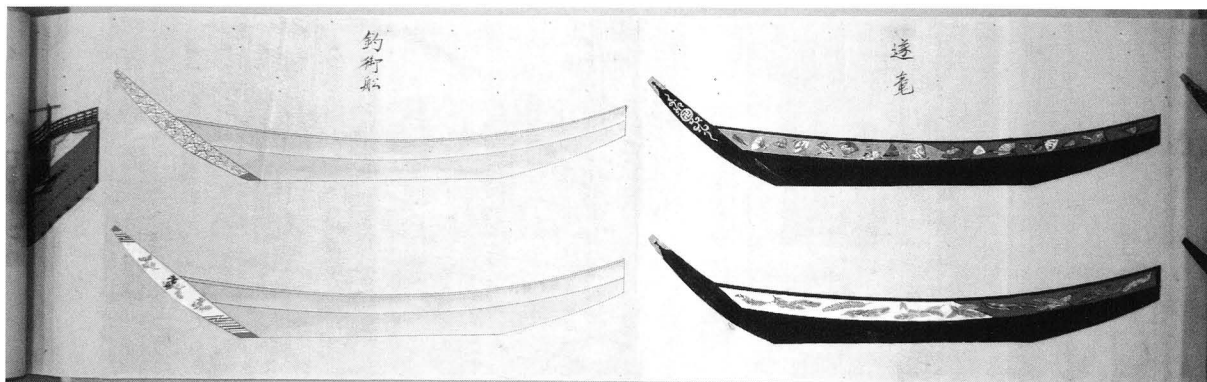
9：蹴波

7：千山

10：(記載なし)

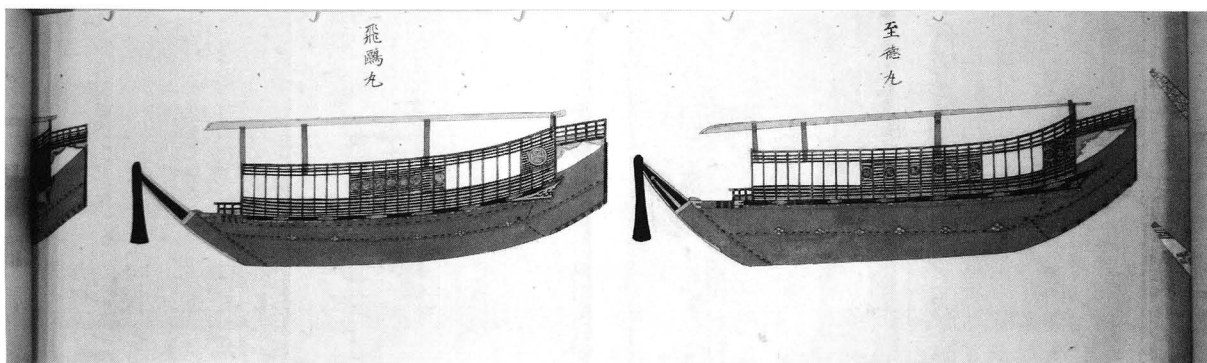
8：(記載なし)

PL.203「徳島藩御船絵巻」拡大(1)



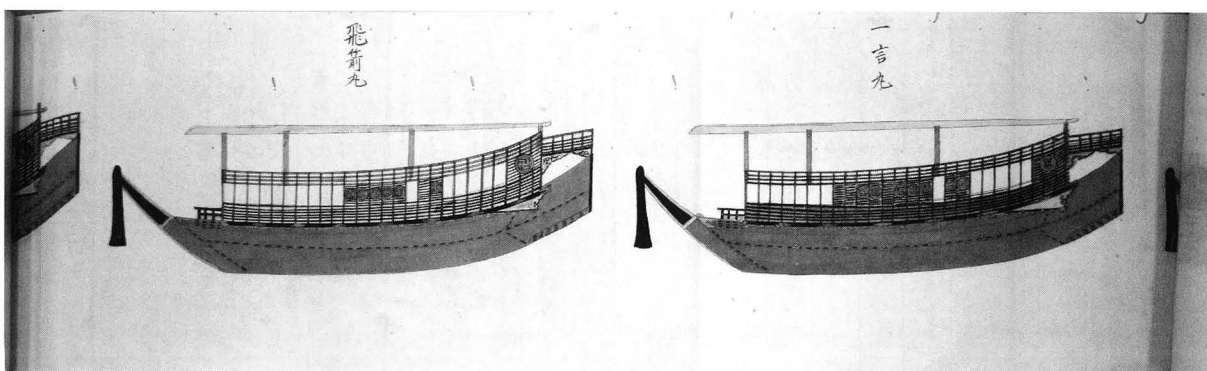
13：釣御船
14：(記載なし)

11：逐竜丸
12：(記載なし)



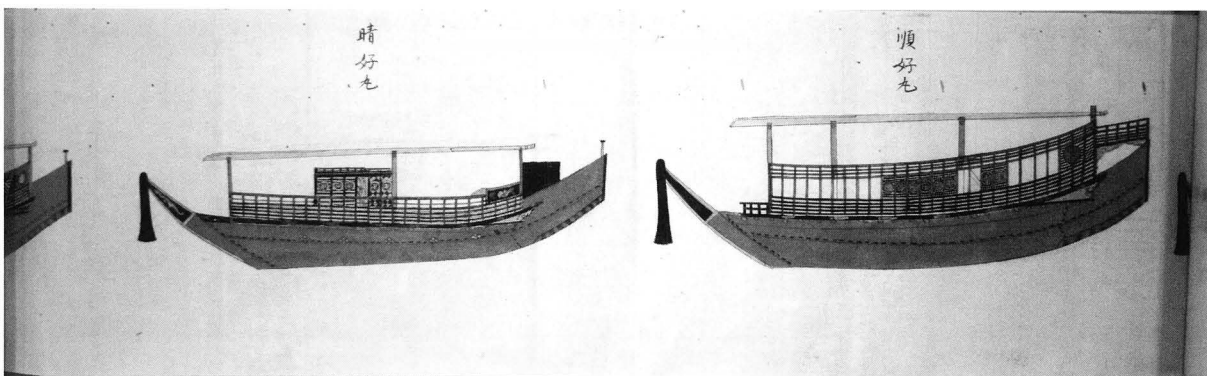
16：飛鷗丸

15：至徳丸



18：飛箭丸

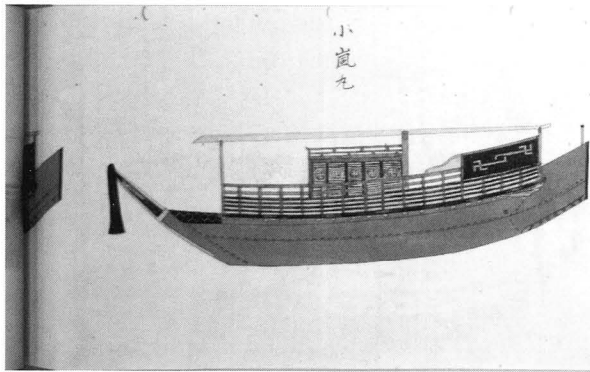
17：一言丸



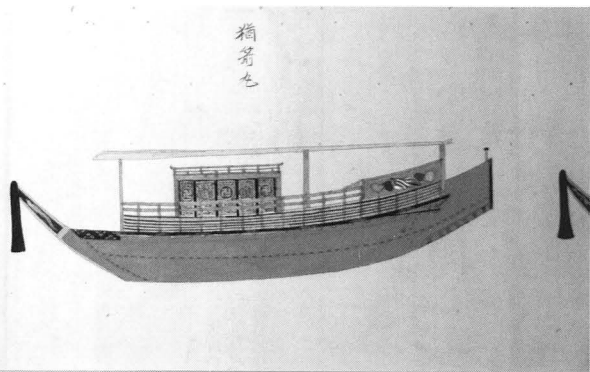
20：晴好丸

19：順光丸

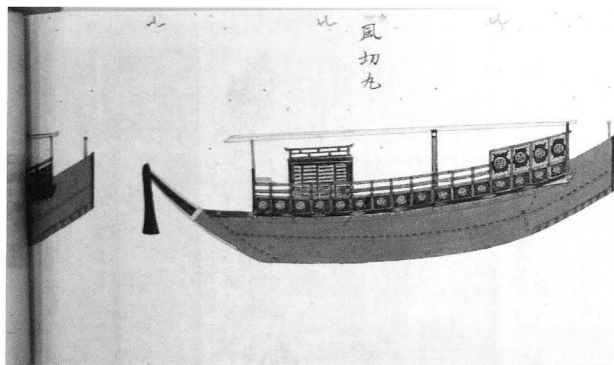
PL.204 「徳島藩御船絵巻」 拡大 (2)



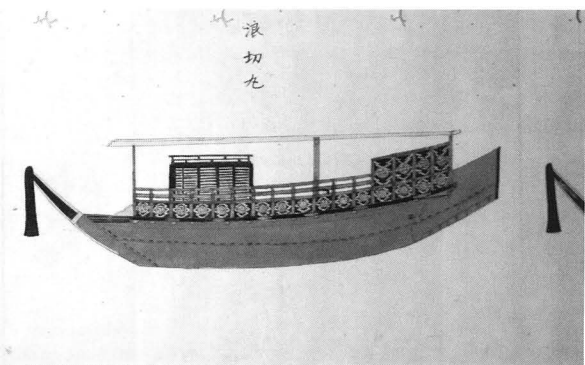
22：小嵐丸



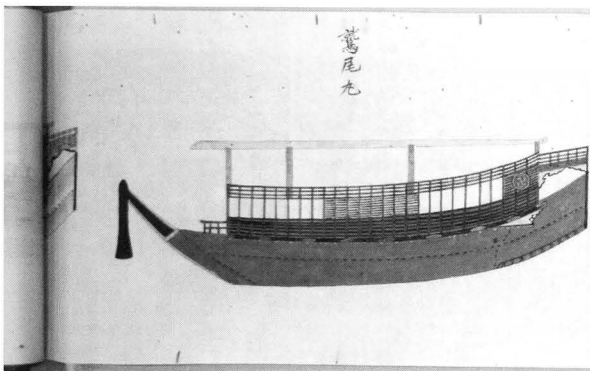
21：猶箭丸



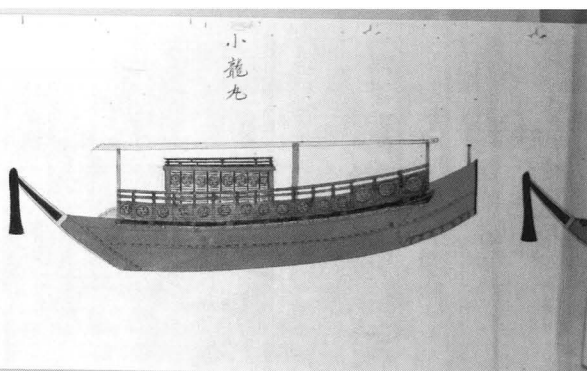
24：風切丸



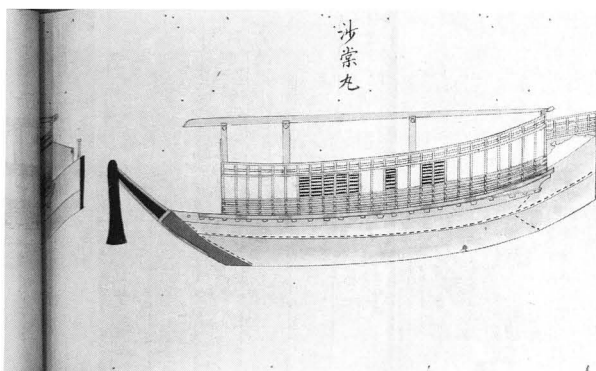
23：波切丸



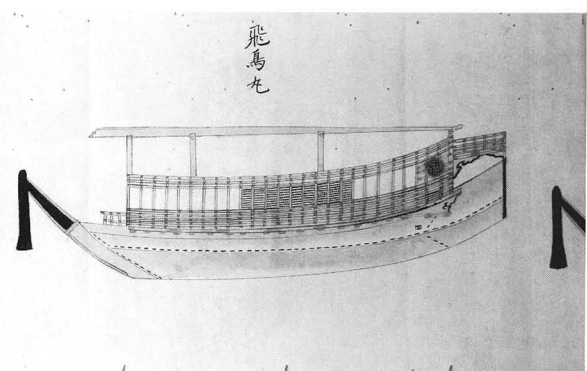
26：鷺尾丸



25：小龍丸

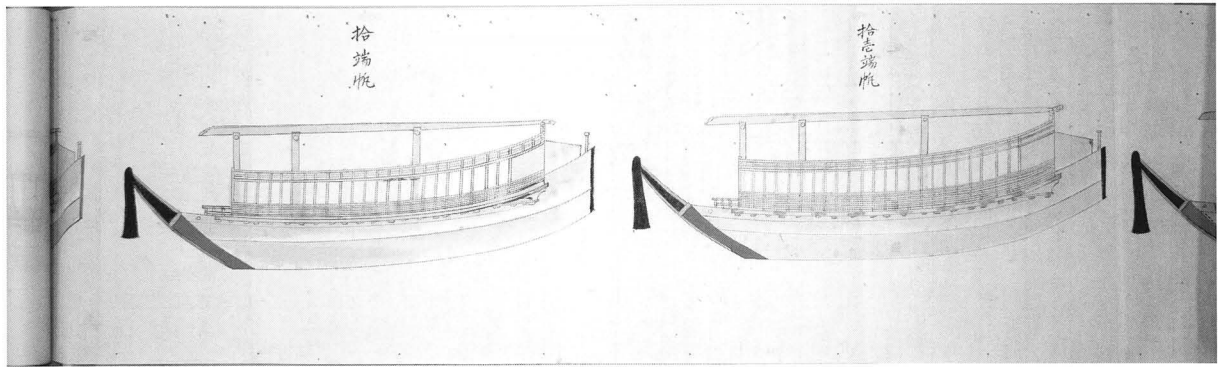


28：沙棠丸



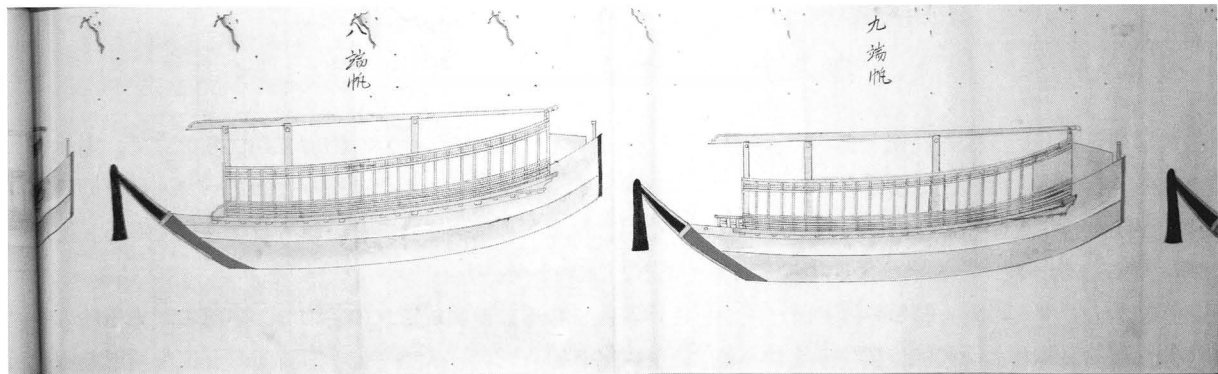
27：飛鳥丸

PL.205 「徳島藩御船絵巻」 拡大 (3)



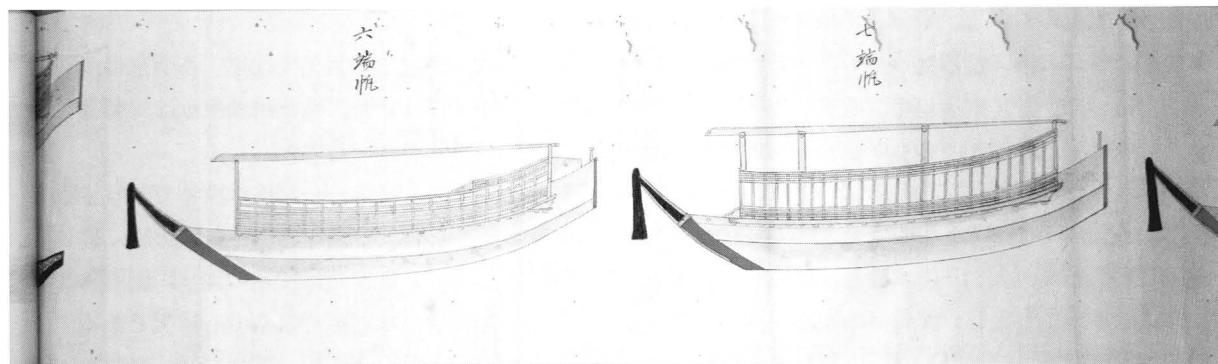
30：拾反帆

29：拾壹反帆



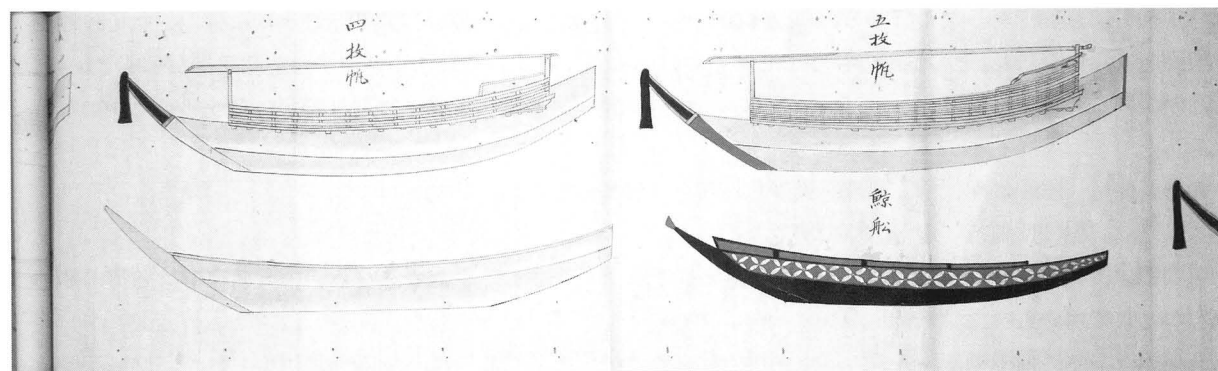
32：八反帆

31：九反帆



34：六反帆

33：七反帆



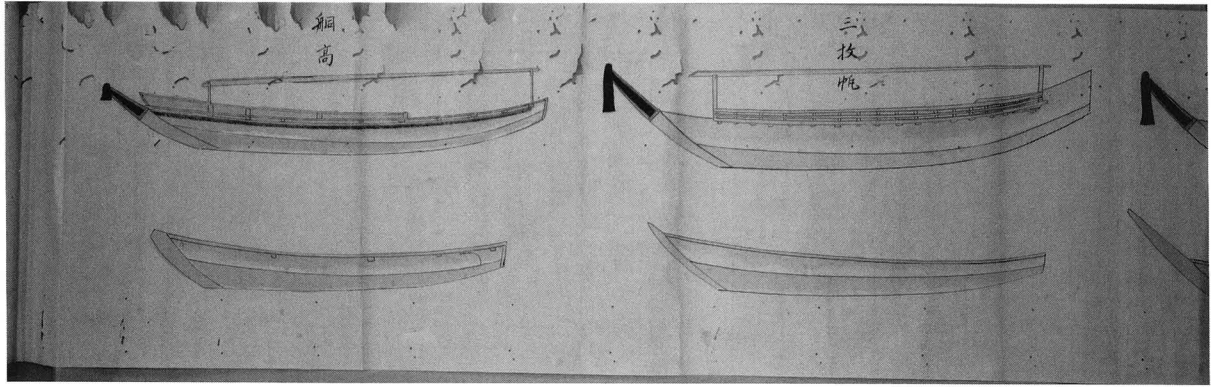
37：四枚帆

35：五枚帆

38：(記載なし)

36：鯨船

PL.206 「徳島藩御船絵巻」 拡大 (4)



41：胴高
42：(記載なし)

39：三枚帆
40：(記載なし)

PL.207「徳島藩御船絵巻」拡大 (5)

な船首形状と細長い船型が特徴であった。上部構造を総矢倉形式として、櫓を40から80挺を立て、船体構造は根棚・中棚・上棚・とで構成する三階造りと、根棚と中棚を一体化した二階造りとがあった。ほぼ同形式の船型が江戸時代を通じて技術的發展を遂げることなく、幕末まで踏襲されたことは大きな特徴である。徳川の平和が260余年続いたことが大きな要因といえよう。

御座船は広く貴人の乗る船の呼称であったが、江戸時代になると、関船形式の船のなかで藩主が乗る船のことを御召関船と称し、一般的に御座船といった。小櫓で70挺立前後、大櫓で50挺前後の豪華な屋形を載せた大型関船であった。船屋形のみは数例現存しており、熊本城の天守閣に展示されている船屋形は熊本藩の海御座船波奈之丸のもので、豪華さが伝わってくる。

御座船にはこの海で使用するもの（海御座船ともいう）以外に、国許や大坂の河川で使用する喫水の浅い川御座船があった。特に大坂には、将軍や西国の諸大名の川御座船が置かれていた。特に川御座船は絢爛豪華であった。参勤交代の際のみならず、朝鮮通信使や琉球使節の迎接用に淀川で用いられた。

小早は、近代海軍で考えるならば駆逐艦に相当する軽快な軍船と考えられており、関船の別称である早船の小型という意味で小早といわれた。櫓数は20挺前後から40挺までとされ、船型・構造ともに関船に準じている細長い船型に、太い一本水押と二階造りの船体構造を標準とするが、上部構造は関船のように総屋倉とせず、簡素な半垣造りとし、また櫓の間隔が関船よりも広く、かつ小型になるほど広がるのも特徴である。

鯨船は、江戸時代に紀伊や土佐、九州などの沿岸捕鯨に使われた船で、勢子船・双海船・持双の三種類があった。勢子船は鯨を網まで追い込み、鉾で突く作業をするため、船首を鋭くとがらせた一本水押の凌波性の高い軽快な八丁櫓の快速船であったことから、幕府・諸藩の注目するところとなり、同型船が水軍に採用されて、連絡や飛脚船に用いられた。その鯨船のなかでも藩主が本船に乗り移るためなどに使用する鯨船を御召鯨船といい、船名が付けられた。本絵巻によって普通の鯨船のほかに、千山丸を含む3艘の御召鯨船が存在することがわかった。

御台所船は、本船に随行して料理を調理することを役割とした船である。

胴高船は、船団に随行する小ぶりの船である。

伝間船は、「伝馬」と略することがある。荷物などを運送するはしけぶねであったが、大名家では随行の船のひとつとして用いられた。

高瀬船は、主に河川で使われた喫水の浅い船の呼称で、主に荷物を輸送するのに用いられた。地域や時代によって、船型や構造は異なる。

なお、貞享年間（1684－1688）の「御船数之覚」には、御馬船や御風呂船なども確認できるし、また船の数も記されているが、詳細な検討はここでは控えたい。

ところで、「安宅御船蔵絵図」の船名が、「徳島藩御船絵巻」で確認できるものに、明光丸、和光丸、至徳丸、飛鳴丸、一言丸、飛箭丸、小嵐丸、鷺尾丸があり、また四枚帆から十一端帆、鯨船、釣船、胴高が描かれている。今回の発掘調査では船の部材も発見されており、今後の復元や船舶特定の参考になると思われる。

おわりに

安宅御船蔵に格納されていた船舶の状況に関する史料は、貞享年間（1684－1688）の「御船数之覚」、元禄12年（1699）の「安宅御有船立相改帳」、元文5年（1740）の「安宅御船数帳」（「蜂須賀家文書」）などがあるが、詳細な検討については今後の課題とする。

「安宅御船蔵絵図」は安宅船置場の配置と船の収納状況を知る唯一手がかりとなる史料であり、発掘調査と合わせることによってその構造をより具体的に解明することができよう。

また、次に紹介した「徳島藩御船絵巻」は、その御船蔵に格納された船舶の具体相を知る上で貴重な資料である。今後の活用を期待し、全図を紹介した次第である。

参考文献

- 石井謙治監修『復元日本大観4 船』世界文化社 1988年
- 石井謙治ほか『図説 和船史話』至誠堂 1981年
- 石井謙治『和船』Ⅰ・Ⅱ 法政大学出版会 1995年
- 徳島県郷土文化会館民俗文化財集編集委員会編『阿波の船』徳島県郷土文化会館 1985年
- （財）船の科学館編『御座船－豪華・絢爛大名の船』（財）日本海事科学振興財団 1991年
- 徳島市立徳島城博物館編『徳島藩御召鯨船千山丸と徳島藩の船』徳島市立徳島城博物館 1997年
- 徳島市立徳島城博物館編『絵図図録第二集 徳島城下とその周辺』徳島市立徳島城博物館 2001年
- 須藤茂樹「蜂須賀伝来「蜂須賀家御船絵巻」について」『史窓』31号 徳島地方史研究会 2001年
- 和船文化・技術研究会編『船の科学館叢書1 重要文化財阿波藩御召鯨船 千山丸』船の科学館 2004年
- 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』吉川弘文館 1979－1993年